新今昔物語

第52話

古堤街道を往く⑮
「JR住道駅 ～明治以来の大東の玄関口～」

大東市の玄関口として毎日多くの人が利用しているJR住道駅は、明治28年（1895）、浪速鉄道の開通に伴い開業しました。浪速鉄道は、片町～四条畷間を39分で結び、途中、放出・徳庵・住道の各駅に停車する路線でした。開業当時、周辺では唯一の鉄道路線だったことから、中河内方面に通じる住道駅では生駒の宝山寺や石切神社（現・東大阪市）などへ向かう参詣客が大勢下車し、駅前の商店街は大変なにぎわいだったそうです。

浪速鉄道は、開業後間もない明治30年に関西鉄道に併合され、明治40年に国有化されました。大正時代からは、始発駅にちなんだ「片町線」の名で呼ばれるようになりました。あまり知られていませんが、昭和54年には関西の国鉄路線で初めて自動改札機が片町線に導入されています。昭和63年、JR「学研都市線」と名を改めましたが、「片町線」の愛称は今でも多くの人に親しまれています。

住道駅の東改札口を出ると、左手には、飯盛城や三箇島の教会など戦国時代の市域の情景を描いた信楽焼の陶板壁画が飾られています。駅北側にある商業ビル・大東サンメイツは、昭和53年、駅前開発の目玉事業としてオープンしました。サンメイツ2番館のあたりには、かつて大東市の前身である住道町の役場がありました。市制施行後、住道町役場は大東市役所に変わり、昭和40年に現在地に移転するまで機能していました。近年の駅前開発では、戦国時代のキリシタン伝播以来、大東と縁が深いスペインの街並みをモデルとし、駅北側の商業ビル・ポップタウンや南側の末広公園などにスペイン風の要素が取り入れられています。

次回は、恩智川を越え、御供田方面へ向かいます。

（生涯学習課）

昭和40年頃の片町線

住道駅改札前の壁画

スペイン･アルハンブラ宮殿のライオン像を模した駅前のライオン像